

高齢者大学文芸部 3月歌会

春へむかふ通過点かと一日を書類散らして申告書を書く
山代 静子
自給率四割満たぬ国となり餃子事件の警鐘は鳴る
宮本 幸子
鉢植の部屋に置きたる福寿草黄金の色の二輪が咲きぬ
安東 綾子
草むらに余光とどめつ山の端に吸はるることく冬日落ちゆく
中川 愛子
天網の枝広げたる棕老樹冬眠続く如月の日々
北村 玉恵
「あの一言はねばよかった」寒の夜眠れぬままに外はしらみ初む
山田 弘子
病む夫の育てしシンビ競ふがに花芽つけをり春は間近し
中原 光子
小鳥らに啄まれたる金柑の一つを食めば甘さ広がる
山城 雅子
つつがなく過ごせし今日の有り難く両手を合はす仏壇の前
中村トメ子
足取りのいと軽やかに下校の子何かよきことありし風情に
梅野カヲル



万句の里俳句会 2月句会

玉のごと生れてきにけり福寿草
丸山美代子
推薦を得て大試験免がるる
岩木 敬治
折角の探梅たれぞ雨女
打出 貞
雛飾る家族増えたる心地して
隈部 輝子
白梅や在りし日の父彷彿と
田島 房子
和装せる乙女の立ち居針供養
加藤 妙子
点になり漂ふ鴨の湖光る
北村 妙子
遠山に残雪淡く光りけり
平山 邦子
ものの芽のほつほつ目覚む昨夜の雨
宮本 雅子
雨音の春の調べとなりてゆく
林 まつ子
さらさらと煌めき流る春の水
富田 幸子
新校舎かけ合ふ声や寒稽古
茨木 幸子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

いも焼耐 父の位牌が待つとろう
小川 繁美
物足らん 主人はまるで下宿人
狩野 本六
こらどうし 花嫁が逃げ出アたはず
高倉 新米
物足らん 花見しよらす禁酒会
田尻 浩風
こらどうし もう追いつかん孫の足
須藤 新生
人事異動 枕濡らさず左遷組
光堀 善教
物足らん 洗濯板のごたる胸
窪田 明德
その結果 同体と見て取り直し
田中 孝幸

せせらぎ俳句会 2月例会

二歳児の謎めく絵描く日向縁
ひなたえん
冷えびえときさらぎの月反り返り
寺本 和子
薄氷をつつき金魚の浮き沈み
服部 静子
ヘルパーの今日より替り日脚伸ぶ
坂本まつえ
水餅を掬ふ終りの一つかな
藤本 邦治
晩白柚挽げば撓みし枝の撥ね
渡辺満喜子
豆撒きの豆煎り呉れし夫なりし
村山 数恵
家具の位置変へてつまづく春隣
渡辺ふみ子
風邪の児の切れ切れ唱ふ雛の歌
藤本アツ子
奥球磨の古き慣はししゆなめじよ
内村 泊虹
静寂の街にハラハラ積もる雪
渡辺 宏
初旅の決りて今日の会議終ふ
渡辺 白魚
ぼかぼかと春を感じる昼下がり
(中二) 渡辺 一史
朝のうちは寒いが昼はもう春だ
(中二) 渡辺 大寿

肥後狂句水笑会 2月例会

菌の痛む まるでロダンの像みたい
清原 英坊
スーパード ころり献立替えらした
井手 水光
すみません もう先約のあるデート
神尾 凡骨
すみません あなたに言えん夢を見た
吉岡 三水

七城短歌会 2月詠草

もうやめた つるつばげには無か葉
続 義昭
もうやめた 言うたその日にたつ煙
宮上 美由
スーパード 安売り買うて腐らせた
御手洗三代
スーパード 挨拶したが誰だろか
柏原 乗仏
スーパード 夕飯しや買うちうつちよこか
平井 江彩
もうやめた 日帰りツアーはつんなえん
中島 五女
菌の痛む 豆腐やわめに炊いてくれ
山隈 好茶

旭志文芸俳句会 2月詠草

微かなる音立ててゐる古時計吾の聞く耳遠くなり
池田 禮子
せば
針に糸の難無く通る嬉しさに時を忘れてポーチをつくる
堀 甲子

泗水短歌会 2月詠草

霜まじる登校の児ら時間帯面伏せつつも足どり早し
福原美智子
四日臥しむつきいちまい汚さずに逝きにし亡夫へ今更に謝す
内田つね代
校歌祭年代交えいざ歌わん母校の歌の高らかに響く
高藤タツノ
遠阿蘇の白銀の嶺輝くを見つつ散歩の足どり軽し
中山 定子
羊羹に惹かれ正座せる遠き日の吾を踏たすか茶室の映像
長尾はるみ
五分咲きの白梅一枝仏前に供えて亡夫に春を告げたり
平嶋きくえ
朝明けの冷たい空気に触れながら鞍岳仰ぎ心の癒ゆる
宮本 峯子
バレンタインとてチョコレート亡夫に届く送られた娘の思ひ頂く
増田久美子
日日続く寒さに暇をもて余し綾の小路のテープに笑ふも
大島 きと

七城短歌会 2月詠草

われよりも背を越す孫にお年玉
芹川 蓉子
山茶花の一輪の彩参道に
水谷 ミネ
初御堂飛機爆音も爽やかに
東 芳子
年始め、夜半の雷鳴近く見え
郷 ミヤ子
孫の鉢一番咲きとふ桜草
中尾ヨシコ
除夜の鐘つつがなく年重ねけり
出田みどり

